

農業技術 プリズム

長崎県のイチゴは、栽培面積274 畝(2014年)、出荷量は全国5位と、県施設園芸の重要な品目となっている。12年から大粒で多収、良食味の品種「ゆめのか」の導入が始まり、センターでは「ゆめのか」の栽培技術開発に取り組んでいる。その中で、長崎県型高設栽培で「ゆめのか」に適した栽植密度(株間)を検討し、二条千鳥植えて株間を15、20、25、30センチ、その後の収量などを比較した。

2年間の試験の結果、高単価で取引される年内収量は、株間15センチで最も多くなるが、1月以降は20〜25センチの株間でも遜色ない収量が得られた。

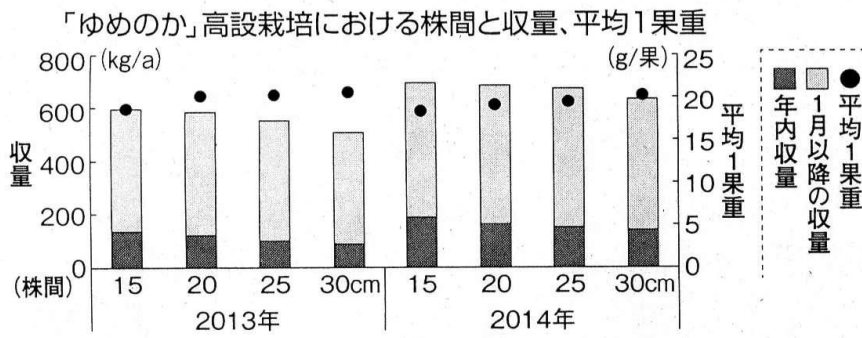
一方で、株間が狭いと果実が小さくなることが分かった。特に栽培面積が大きい場合や労力に余裕がない場合は、25センチ程度の広めの株間を勧めたい。

「ゆめのか」導入により、県のイチゴは着実に収量が増加してきている。今年度から一層の増収へ向けて技術開発に取り組み、10センチ収量日本一を目指していく。

イチゴ「ゆめのか」栽植密度 二条千鳥植えの株間 高設栽培で20〜25センチ

(図)。また、株間が狭いほど第2花房の収穫開始が遅れ、1、2月に収穫の谷間ができやすいことも分かった。

以上のことから「ゆめのか」の高設栽培における株間は、20〜25センチが適していると考えられる。



(県農林技術開発センター 産園芸研究部門野菜研究室 主任 前田 衡)